

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00739

研究課題名(和文) 東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界

研究課題名(英文) Northern Expansion and Adaptation Limitations of Temperate Neolithic Culture in Northeast Asia

研究代表者

福田 正宏 (Fukuda, Masahiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：20431877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日露両国での新石器/縄文時代遺跡群の共同調査を通じて、環日本海北部(スレドネアムールスカヤ低地帯-アムール下流域-サハリン-北海道)の北緯45～50度地帯における新石器時代の文化交流や適応戦略を包括的に解明した。サハリン南部の新石器時代前期、ユダヤ自治州西部の新石器時代中期・晩期、北海道北部の縄文中期～晩期に関する新事実が、遺跡発掘調査によって明らかにされた。また、東西及び南北方向で遠隔地に住む集団が接触し、大きな文化的影響が起こったにも関わらず、各地で地域生態系に適した生活システムが維持されたプロセスが、放射性炭素年代を伴う高精度編年にもとづいて長期的に復元された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大河アムールを介して集団や文物が東西往来するという従来型の史観を超えて、環境適応論の立場から南北軸の動きを調べることにより、環日本海北部における新石器文化群の共通性と多様性を複線的に捉えることができた。また、日露間の国境線を超えて日本列島北辺域の先史文化変遷の一端を解明することができた。日露両国の遺跡調査が行き届いていなかった地域において共同発掘調査を実施することで、新たな考古学的事実を追加し、各地における歴史文化遺産の保護活用に貢献することができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, though the joint research of Neolithic/Jomon archaeological sites in both Russia and Japan, the Neolithic cultural exchange and adaptation strategy in the 45-50 degrees north latitude zone of the northern circum of Japan Sea area (i.e., Sredneamurskaya Lowland, Lower Amur basin, Sakhalin and Hokkaido Islands) were elucidated comprehensively. New archaeological fieldworks have revealed new facts on the Early Neolithic Southern Sakhalin, the Middle and Final Neolithic Western Jewish Autonomous Oblast, and the Middle to Final Jomon of the Northern Hokkaido. Based on high-precision chronology with radiocarbon dates, the long-term process of the maintaining living system suitable for local ecosystems in each region was restored, despite historically remarkable social impacts caused by contacts between distant populations in the east-west and north-south directions.

研究分野：考古学

キーワード：新石器/縄文時代 ロシア極東 北海道 環境適応 国際学术交流

1. 研究開始当初の背景

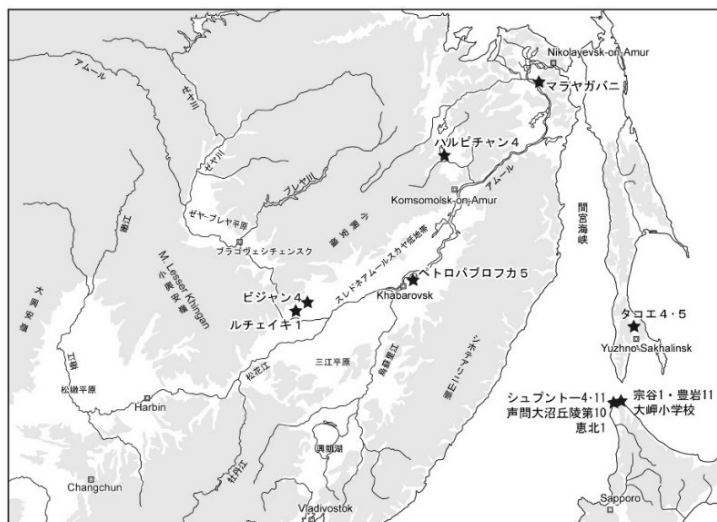
1999 年以来、東京大学考古学研究室は、サハリン国立大学やハバロフスク地方郷土誌博物館等との日露国際共同研究を通じて、新石器/縄文時代～中世・オホーツク文化期の北海道・サハリン島・アムール下流域における先史文化交流史を通時的に解明してきた。新石器時代研究を進めるにあたり議論の基盤としてきたのが、共同研究代表を務めてきた大貫静夫(2010)が提案した、平底土器と堅穴住居の存在を指標とし、アムール下流域や日本列島を「極東平底土器社会」の一部として捉える方法である。これは、オクラドニコフ(1941)による極東史の捉え方を継承発展させたものである。大貫が代表者となった科研費・基盤研究(B)「東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究」(平成 19～22 年度)では、ロシア極東新石器時代考古学の中核的地域とされるアムール下流域における新石器時代高精度編年を構築し、極東と東シベリアとの社会生態学的移行帯における接触関係の存在を明らかにした(福田ほか編 2011)。また、科研費・基盤研究(A)「環日本海北回廊の考古学的研究」(平成 23～27 年度)では、定着性が相対的に低い完新世初頭の様相に迫った(福田ほか編 2014)。一連の研究を進めるなか、アムールを介した東西方向の接触関係に注目する従来の研究方法に限界があると感じるようになった。それとはべつに、本研究代表者による科研費・若手研究(A)「日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究」(平成 25～28 年度)では、北海道・湧別市川遺跡で発掘調査を実施し、縄文早期の道東における適応形態と居住環境を復元した。そして、大陸渡来文化と目されてきた北海道の「石刃鎌文化」に関して、完新世初頭の列島縄文文化に特有の地域間交流・集落構造があること、また、8200 年前の世界的な寒冷化事件に対するリスク回避行為として、サハリン方面から一時的な技術移入がなされことを指摘した(福田編 2015)。

アムール川を介した東西方向の動きに比べると注目されにくい、気候環境を超えて南北方向に文物が拡散・収縮する現象も、無視できない規模や頻度で起こっている。北緯 45 度前後の北海道・サハリン南部における縄文早期後半の新石器化プロセスを調査したところ、気候変動に伴う温暖環境の拡大/縮小と温帯性生活システムの持続性は、不可分の関係にあると考えられた。その一方で、並行期のサハリン島には、そうした南方系とは別の居住形態や生業技術があり、それは、スタノボイ山脈より北にひろがる東シベリアの新石器文化の様相とも異なることがわかってきた。代表者らはアムール下流域の北緯 50 度付近でも並行期の遺跡群の調査を実施しており、すでに本地域ではサハリンとも東シベリアとも関連しない別の居住形態や生業技術が存在したことを捉えている。以上の過去約 20 年間の経緯をふまえ、本研究は立案された。

2. 研究の目的

環日本海地域の新石器文化群は、温帯モンスーンの影響を強く受ける気候環境に適した生活システムが形成されたという点で、構造論的に一体である。この大きな枠組みのなかに様々な景観・地域生態系が存在し、多様な適応形態が生まれた。その一つ縄文文化は、完新世初頭の全体的な温暖化傾向のなかで、温暖湿潤気候と山岳地形に由来する箱庭的景観が特徴的な列島環境への適応をはたした。縄文文化は大陸側に拡大しにくく、周辺文化群と接触/融合しにくい性質であった。温帯性の生活システムを基盤とする列島縄文集団にとって、日頃慣れ親しんだ地域生態系とは異なる場所への生活・行動領域拡大は難しかったのか、あるいは、そもそも拡大する理由がなかったのか。また、異なる気候環境への進出の要件や動機は如何なるものであったのか。大陸諸集団の場合、列島縄文集団と比べ、周辺地域への拡大進出は大規模かつ頻繁に起こったと言えるが、異なる気候環境に進出したときの居住要件と動機は、列島縄文集団と共通したのか、あるいは違ったのか。

本研究では、環日本海北部の北緯 45～50 度地帯における新石器文化動態に注目する。この地域は、温帯から亜寒帯への社会生態学的移行帯にあたる。今判明していることから推察するに、温帯性の新石器文化群が南方から進出拡大してきた一方で、スタノボイ山脈より北方の東シベリアに認められる文化動態ともやや異なる居住形態や技術が隣接して存在していたとみられる。そこで本研究では、発掘調査と資料分析から、温帯性新石器文化が北方寒冷地に拡大したプロセスを高精度年代測定とともに復元し、その適応形態を明らかにする。



本研究で扱った地域と新石器/縄文時代遺跡群

従来、大興安嶺から日本列島地域までの北緯 45～50 度地帯の歴史文化に関しては、大河アムールを介して民族や文物が東西往来するという前提のもと、説明されることが多かった。たしかに歴史全体を見通せば、そうした傾向は認められる。だが、完新世に定着的食料採集社会が形成されてからは、社会集団が気候環境を超えて南北に動く時期と、歴史の重要な画期とが重なる場合が多いこともわかってきた。そこで本研究では、東西軸だけでなく南北軸でも人や物の動きを捉え、新石器文化の共通性と多様性を複線的に説明する。

3. 研究の方法

ゼヤ・ブレヤ平野からスレドネアムールスカヤ低地帯、アムール下流域、サハリン・北海道の様相を見通すため、日露両国で新石器/縄文遺跡群の発掘調査を行い、調査成果の整理・分析と関連資料の調査研究を行った。具体的な研究項目は、以下の通りである。

(1) ロシア極東・ユダヤ自治州における新石器時代遺跡群の発掘調査

2018 年度にハバロフスク地方郷土誌博物館と共同で、新石器時代に関する考古学的情報が非常に少ないユダヤ自治州西部で遺跡探査を行い、新石器時代 2 遺跡で発掘調査を行った。2018～2019 年度に同館で出土遺物の整理作業と関連資料の調査を行い、東京大学考古学研究室で調査データ類の整理・図化・分析作業を進めた。¹⁴C 年代測定・動植物遺体同定分析・金属器元素分析を施した後、調査報告書を刊行し、日露中韓 4 か国の研究者間で議論を行った。

(2) ロシア極東・サハリン州における新石器時代遺跡群の発掘調査

2018 年度、サハリン国立大学考古学教育博物館において、現地の新規発掘調査で出土した新石器時代遺物群の観察と分析を行った。その結果にもとづき、2019 年度に同館と共同で、サハリン州ドーリンスク地区における遺跡分布調査を行った。調査終了後、同館で出土遺物の整理作業と関連資料の調査を行い、東京大学考古学研究室で調査データ類の整理・図化・分析作業を進めた。得られた結果を継承発展させるため、サハリン島における更新世末～完新世初頭の新石器社会形成に焦点を当てた共同研究を新たに立ち上げた。

(3) 北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査

2018 年度、北海道オホーツク海沿岸における遺跡群の立地環境と保存状況の確認調査を行った。その結果をふまえ、2019・2021 年度に稚内市教育委員会の協力を受けて、稚内市域 2 地区で縄文遺跡群の発掘調査を行った。宗谷丘陵(更新世段丘)上及びその周辺における周知の埋蔵文化財包蔵地を基点とし、広域的に試掘調査を行い、包含層の保存状況を確認した。調査終了後に東京大学考古学研究室で出土遺物の整理・分析作業を行った。関連して、2020～2021 年度に、稚内市教育委員会が保管する稚内市大岬地区所在の稚内市立大岬小学校及びその周辺から出土した縄文土器群を借用し、整理・分析作業を行い、その結果を公開した。

(4) アムール流域東部における新石器時代高精度編年の更新

2020・2021 年度、小興安嶺以東となるアムール流域東部(ユダヤ自治州～ハバロフスク地方)を対象に、新石器時代諸文化に関する¹⁴C年代値を集成した。本研究項目には、上記研究項目(1)の成果も含まれる。また、過去に実施された 3 遺跡(マラヤガバニ・ハルピチャン 4・ペトロパブロフカ 5)に関する発掘調査及び分析の結果を整理し、信頼性の高い測定値を新たに追加した。そして、ロシア極東新石器時代編年の基軸となるアムール流域東部の広域編年を構築した。

4. 研究成果

(1) ロシア極東・ユダヤ自治州における新石器時代遺跡群の発掘調査

a. ルチェイキ 1 遺跡の発掘調査

本遺跡では堅穴住居 1 軒を完掘し、第 I 期:現代(ソ連時代の入植以降)、第 II 期:靺鞨文化期(1532-1385 cal BP:n=2)、第 III 期:ポリツェ文化期(BC3～AD4 世紀:本遺跡では年代値なし)、第 IV 期:新石器/古金属器時代移行期(3839-3492 cal BP: n=6)という遺跡形成・埋没過程があることが判明した。出土土器は、I 群:マリシエボ式、II 群:ルチェイキ式、III 群:ポリツェ式、IV 群:靺鞨式(靺鞨罐)に分類することができる。

堅穴住居は、平面プランが略長方形(約 4.8m×4.3m)で、長軸が南東-北西をむく。居住時期は第 IV 期(紀元前 2 千年紀前半)であり、この年代は沿海地方南部の新石器時代後期ザイサノフカ文化最新段階に近い。住居構造は、スレドネアムールスカヤ低地帯西部の古金属器時代ウリル文化と共通する。居住に伴う遺物は、II 群土器・剥片石器群・植物遺体(カバノキ属・コナラ属コナラ節)である。床面付近から、シカ・イノシシ類・魚類の骨が出土した。松花江河口域における紀元前 2 千年紀前半の居住形態を示す好例である。

堅穴住居に伴う II 群土器は、深鉢が大半を占め、壺が少量ある。古金属器時代ウリル文化最古段階(リブノエ湖段階)に相当する。本遺跡 II 群土器をもとに、ルチェイキ式を設定することを提案した。ルチェイキ式の分布は、暫定的に、アムール川と松花江の合流地点からアムール川と烏蘇里江の合流地点までである。ルチェイキ式は、沿海地方南部のザイサノフカ式最新段階と同様に、櫛引文や雷文系の文様が特徴となる。沿海地方と比較すると、櫛引文土器は同様に深鉢主体となるが、大型深鉢(甕)は確認されていない。雷文系土器は深鉢と壺が多いようにみえるが、深

鉢と判断した破片中に、沿海地方の遺跡でよく見られる浅鉢形と同類の器形が含まれる可能性は否定できない。将来的には、黒竜江省内にその起源や類例を求められることが期待される。

第Ⅳ期の住居放棄後、堅穴の窪みが完全に埋没する前の状態で、最下層の住居床面及びその付近が長期間にわたり繰り返し利用されていた。第Ⅲ期の人為活動に伴う攪拌作用の影響は堅穴内に及んでいないが、第Ⅱ期(AD5～10 世紀中頃)には堅穴の窪みとその周辺が利用された。堅穴床面及びその周辺からⅣ群土器、靺鞨期の¹⁴C年代をもつ炭化物、そして鉄器が出土した。これらは、第Ⅱ期における堅穴の再利用に伴う。また、調査区内にマルイシェボ文化層は存在しないが、Ⅰ群土器が調査区の表土及び上層、さらに床面及びその直上から出土した。表土及び上層からの出土は、第Ⅰ期に調査区近隣に包蔵されていたマルイシェボ文化層を崩した土砂により調査区上部が盛土され、現地形に整地するため土地改変が行われたことに由来する。また床面付近からの出土品は、第Ⅱ期の活動に伴って下層中に紛れ込んだものである。今回の調査成果は、定着的な居住に適した場所が必然的に制限される、アムール氾濫原における土地利用史のあり方の一端を示す。

b. ビジャン 4 遺跡の発掘調査

本遺跡では、新石器時代前期～中期前半(コンドン文化期並行)の遺物集中が検出された予備調査の結果にもとづき、調査区を拡張して発掘を行った。テストピットからは、ゼヤ・ブレヤ平原に分布する隆起線文土器、アムール下流域系統のコンドン式土器、そして石器群が一緒に出土した。遺構の明瞭な遺構プランは確認されていない。

出土土器の大半は、1類(アムール編目文)と2類(隆起線文)に分類することができる。1類は文様配置と施文範囲、また菱形型押文内部の装飾の有無によって1A類と1B類に細分可能である。既往研究によれば、前者から後者へ時間的に変化する。2類にはアムール編目文の菱形文様を隆起線により表現する例も含まれており、このことは、本遺跡が位置する松花江河口域ないしは松花江下流域に、極東東部のアムール編目文系統と極東西部の隆起線文系統の折衷型式が広く分布することを示唆する。土器付着物の¹⁴C年代(n=5)は、土器分類と対応させると、1A類が8800-8500 cal BP、1B類が7700-7600 cal BP、2類が7600-7400 cal BPとなる。

出土石器群は細石刃石器群と石刃石器群を主体とし、ほかに磨製石器・両面調整石器・剥片石器・礫石器がある。出土土器と同様、新石器時代中期に位置付けられる。

小興安嶺西側となるゼヤ・ブレヤ平原では、隆起線文土器群が特徴の、下流域とは大きく異なる新石器文化動態があることが知られていた。また隆起線文は、アムール下流域における新石器時代前期以降の土器にもしばしば出現することから、アムールを介した交流の中で東西二つの文化動態の間に接触関係が生じた可能性があるとして指摘されてきた。今回の調査により、それら2地域の間位置するユダヤ自治州で、考古資料の空白を埋めることができた。また、沿海地方や松嫩平原で従来報告されてきた新石器時代資料群との有機的な関係が判明した。

(2) ロシア極東・サハリン州における新石器時代遺跡群の発掘調査

サハリン国立大学による事前調査結果をふまえ、タコエ丘陵(更新世段丘)上で、新石器時代前期の遺跡包含層を発見するための試掘調査を行った。タコエ4遺跡のテストピット調査により、腐植土混じりのローム質土層(Ⅱ層)から遺構面が検出された。遺構は、しっかりと立ち上がる壁をもたないが、埋土中に土器や石器集中を含む、定着性/回帰性の高い居住痕跡である。出土土器は、小型の無文深鉢と条痕文をもつ口縁部片であり、ともに8000 cal BPより古い北海道の縄文早期並行の土器型式に対比できる。出土石器群は石刃石器群を主体とし、ほかに両面調整石器・磨製石器がある。遺構内出土木炭の¹⁴C年代は未測定であるが、出土遺物には、サハリン南部における新石器時代前期の特徴が認められる。Ⅱ層下部から細石刃石器群が混在して出土したため、さらに掘り下げたところ、ローム土層(Ⅲ層)で、後期旧石器(峠下細石刃石器群)段階に属する可能性がある細石刃石器群の面的なひろがりを確認した。タコエ5遺跡のテストピット調査でも、Ⅲ層と同じ堆積状況を確認した。これにより、サハリン南部の更新世段丘上に、北海道の後期旧石器と前期新石器の生活面が重複した包含層が広く分布することが判明した。

(3) 北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査

2019年度は、稚内市声問地区及びその周辺に所在する縄文時代4遺跡(恵北1遺跡・シュプントー4遺跡・同5遺跡・声問大沼丘陵第10遺跡)で範囲確認調査を行った。恵北1遺跡とシュプントー5遺跡では、縄文中期～後期(北筒式期)の遺物包含層と遺構が比較的良好な形で保存されていることを確認した。ともに集落遺跡である可能性が高い。声問大沼丘陵第10遺跡では包含層の存在は確認されていないが、周知の遺跡包蔵地範囲の背後にひろがる声問丘陵上の北縁部に未知の包蔵地が残存する可能性はある。稚内市大沼周辺の縄文中期～後期の遺跡群は、河川や湖沼に面した更新世段丘縁辺部の比較的平坦な位置に立地する傾向にある。当時の大沼周辺の内湾環境を見下ろす、居住または陸域活動拠点に適した地点が選択されたことが明らかとなった。

2021年度は、稚内市宗谷地区の宗谷1遺跡、同豊岩地区の豊岩11遺跡で範囲確認調査を行った。更新世段丘縁辺部の平坦面に位置する宗谷1遺跡では、縄文中期中葉～末の遺物包含層が発見された。遺跡の主体部と想定される地形的に高く平坦な面は削平等の人為的攪拌の影響を受けているが、包含層は隣接する森林側にもひろがり、そこでは比較的良好な形で保存されていることを確認した。豊岩11遺跡は、段丘上における埋蔵文化財包蔵地(縄文中期か)の周辺における範囲確認調査中、新たに発見された。縄文時代のものと目される土器・石器の集中部を確認し

た。現在、東京大学考古学研究室において出土遺物等の分析を進めている。

一方、稚内市立大岬小学校及びその周辺から出土した縄文土器群を調査したところ、縄文中期～後期(北筒式期)、同後期中葉、同晩期前葉の資料があり、宗谷地方における縄文時代生活史を通時的に捉える必要があることが判明した。

(4) アムール流域東部における新石器時代高精度編年の更新

アムール下流域(ハバロフスク地方)新石器時代遺跡群から出土した炭化物と土器付着物の¹⁴C年代値に関して、初出文献及び関連文献の記載を再検討し、本論文後に公開された年代測定結果(ユダヤ自治州も含む)を加えた結果を報告した。

発掘者や各研究者の記述に従い、各遺跡の文化層や遺構に共伴する、もしくは共伴する可能性が高いと判断した炭化物の年代値を集成した結果、アムール下流域における考古学文化群の年代幅は以下ようになった。

オシポフカ	13,260±100	～	9,890±230	¹⁴ C BP (n=39)
ヤミフタ	8,210±50	～	7,970±60	¹⁴ C BP (n=5)
マリンスキー	8,585±65	～	7,180±120	¹⁴ C BP (n=3)
コンドン	7,655±45	～	6,185±45	¹⁴ C BP (n=15)
マルィシェボ	6,070±90	～	4,380±40	¹⁴ C BP (n=27)
ボズネセノフカ	4,240±35	～	3,455±85	¹⁴ C BP (n=31)
コッピ	3,315±55	～	2,760±40	¹⁴ C BP (n=9)

マリンスキーの年代幅はヤミフタとコンドン双方の年代幅に重なる。ユダヤ自治州側と比較すると、ルチェイキ1遺跡でマルィシェボ期の活動に伴う5405±25¹⁴C BPはマルィシェボ文化の範囲内に収まる。また、同遺跡の新石器/古金属器移行期(リブノエ湖段階:3520±20～3330±20¹⁴C BP)の上限はボズネセノフカ文化の範囲にも及ぶが、アムール河口及び間宮海峡西岸に分布するコッピ文化の年代幅にはほぼ重なると言える。

一方、土器付着物の年代値群の分布推移からは、各土器型式の年代幅は以下ようになった。

オシポフカ	11,650±60	～	10,060±50	¹⁴ C BP (n=8)
ヤミフタ	9,810±80	～	8,820±70	¹⁴ C BP (n=12)
コンドン	7,985±35	～	6,460±70	¹⁴ C BP (n=32)
マルィシェボ	5,880±45	～	5,125±40	¹⁴ C BP (n=13)
ボズネセノフカ	5,045±45	～	3,920±70	¹⁴ C BP (n=21)
コッピ	3,760±30	～	3,620±25	¹⁴ C BP (n=5)

マリンスキー文化の土器付着物の測定値はないが、他に關しては、前述した出土炭化物の年代値群の分布から導き出された文化変遷の妥当性を補強する。また、これまでに測定された土器付着炭化物の年代値は14000～3200 cal BPの間で切れ目なく変遷しており、文化変遷の大局は既存の考古学的文化を年代順に並べることでほぼ確定することがわかる。なおアムール下流域では、海洋・淡水リザーバー効果の影響を受けて土器付着物の年代が400年程度古くなるので、出土炭化物の年代とは同等に扱うことができない。

ユダヤ自治州では、ビジャン4遺跡から出土した隆起線土器とコンドン式に典型的なアムール編目土器の付着物年代は7895±25～6640±40¹⁴C BPであり、アムール下流域のコンドン式土器の付着物年代群の分布範囲に収まる。ただし、隆起線土器は6845～6700¹⁴C BPであり、そのなかでも若い。ルチェイキ1遺跡のⅡ群(ルチェイキ式)土器の付着物年代は3835±20～3555±20¹⁴C BPであり、アムール下流域のコッピ式土器の付着物年代とほぼ並行する。

新たに測定した土器付着物の年代は、ヤミフタ式が9760±45～9410±35¹⁴C BP、コンドン式が7990±25～6290±25¹⁴C BPとなり、各々既往研究による年代幅に収まる。一方、マルィシェボ式は5220±25～4985±25¹⁴C BPとなり、下限年代は既往研究による年代幅より新しい。これは、マルィシェボ文化の存続期間がもう少し遅れる可能性があることを示唆する。

近年のロシア極東考古学では、従来設定されてきた新石器時代の考古学文化群を初期→前期→中期→後期→晩期に振り分けて説明することが多い。既往研究に従えば、アムール下流域では土器が出現するオシポフカ文化が初期(後期旧石器/新石器時代移行期)、ヤミフタ文化が前期、コンドン・マルィシェボ文化が中期、ボズネセノフカ文化が後期、コッピ文化が晩期(新石器/古金属器時代移行期)に属する。マリンスキー文化に關しては、認定可能であれば、前・中期に跨ることになる。

<引用文献>

- 大貫静夫 2010『縄文文化と東北アジア』『縄文文化の輪郭』141-153頁、同成社。
福田正宏編 2015『日本列島北辺域における新石器/縄文文化のプロセスに関する考古学的研究』東京大学新領域創成科学研究科・同常呂実習施設。
福田正宏ほか編 2011『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設。
福田正宏ほか編 2014『環日本海北回廊の考古学的研究(Ⅰ)』東京大学常呂実習施設。
オクラドニコフ A. P. 1941「シベリアと極東の民族性の起源としての新石器遺跡群」『物質文化史研究所簡報』9、5-14頁(露語)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 國木田大	4. 巻 1
2. 論文標題 アムール川下流域における新石器文化の年代研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道大学考古学研究室研究紀要	6. 最初と最後の頁 27～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Natsuki Daigo	4. 巻 608-609
2. 論文標題 Migration and Adaptation of Jomon People during Pleistocene/Holocene Transition Period in Hokkaido, Japan.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 49～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.quaint.2021.01.009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fukuda, M., Shevkomud, I.Ya., Kunikita, D., Dyakonov, V.M., Gorshkov, M.V., Gabrilchuk, M.A.	4. 巻 39
2. 論文標題 Syalakh-type pottery at the Dalzha-2 site in the Amur river mouth.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 84-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Jang Eunhye, Fukuda Masahiro	4. 巻 40
2. 論文標題 A Study of the Earliest Pottery in the Lower Amur River.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KOREA NEOLITHIC RESEARCH SOCIETY	6. 最初と最後の頁 63～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.35186/jkns.2020.40.63	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田正宏, ガブリルチュク M, 夏木大吾, 國木田大, 張恩惠, ゴルシュコフ M, 森先一貴, 佐藤宏之, 熊木俊朗	4. 巻 34
2. 論文標題 ユダヤ自治州新石器時代ピジャン4遺跡出土の新資料 2017・2018年度試掘調査出土遺物の分析結果報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学考古学研究室研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福田正宏	4. 巻 150
2. 論文標題 北方 日本考古学と「北方」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 121-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fukuda, M.	4. 巻 3
2. 論文標題 Neolithic Settlement and Pottery in East Asia's Northern Environment: From the Russian Far East to the Japanese Archipelago.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Amsadong Site Research Series (Development of Neolithic Cultures and Diversity of Pottery)	6. 最初と最後の頁 157-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 2018-1
2. 論文標題 2016 .	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 107-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 福田正宏	4. 巻 32
2. 論文標題 日露の考古学について思うこと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 江田真毅
2. 発表標題 遺跡から出土する骨の動物学と考古学
3. 学会等名 第164回日本獣医学会学術集会 獣医解剖分科会・サテライトフォーラム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田正宏
2. 発表標題 ロシア極東先史文化と周辺地域 日露共同研究の最新成果にもとづいて -
3. 学会等名 釜山大学校・東アジアSAP融合人材養成事業チーム講演会 Science, Archaeology, Public (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田正宏・ガブリルチュク, M.・國木田大・ゴルシュコフ, M.・張恩恵
2. 発表標題 アムール中流域(松花江河口域)における新石器時代の文化動態 ロシア極東ユダヤ自治州における発掘調査成果にもとづいて
3. 学会等名 2019年度九州史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fukuda, M.
2. 発表標題 Neolithic Adaptation History and Neolithization Process in the Lower Amur: Based on results of our Japan-Russia Joint Researches (2001-)
3. 学会等名 International Workshop “ Investigating Neolithic Trajectories in Northeast Asia ”, Hokkaido University. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋野はな・福田正宏・熊木俊朗・斉藤譲一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之
2. 発表標題 北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査 (2019年度)
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fukuda M.
2. 発表標題 Early Holocene Human Adaptations in the Northern Boundary of Temperate Environment (Russian Far East and Japanese Archipelago).
3. 学会等名 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia: Suyanggae & Lenggong: Prehistory Adaptation. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Vasilevskii A., Grishchenko V., Sato H., Fukuda M.
2. 発表標題 The Stages of Settlement of Islands of the Far-Eastern Seas.
3. 学会等名 International Conference: Historical and recent developments of Russian-Japanese relations (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fukuda, M.
2. 発表標題 Neolithic Settlement and Pottery in East Asian's Northern Environment: From the Russian Far East to Japanese Archipelago.
3. 学会等名 International Symposium on Amsa Site, 2018: Development of Neolithic Cultures and Diversity of Pottery. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田正宏・Gablirchuk, M.・國木田大・Gorshkov, M.・田尻義了・江田真毅・木山克彦・張恩恵・Malyavin, A.・夏木大吾・足立達朗・太田圭・田邊えり・熊木俊朗
2. 発表標題 ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査 (2017・2018年度)
3. 学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田正宏
2. 発表標題 サハリン・アムール流域における東シベリア系遺物について
3. 学会等名 ヤクーチア考古学の最前線
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 福田正宏, 夏木大吾 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設	5. 総ページ数 158
3. 書名 東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界() 総括編	

1. 著者名 福田正宏, 萩野はな 編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂 実習施設	5. 総ページ数 26
3. 書名 東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界() 北海道宗谷地方における縄文時代 遺跡群の実態調査2019年度成果報告書	

1. 著者名 福田正宏, ガプリルチュク M.A., 張恩恵 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂 実習施設	5. 総ページ数 109
3. 書名 東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界() ルチェイキ1遺跡の研究	

1. 著者名 小田裕樹, 小澤佳憲, 西江幸子, 柴畑光博, 渡邊誠, 石田智子, 主税英徳, 齊藤希, 丹羽崇史, 徳留大輔, 福田正宏, 松本圭太, Amgalantugs Tsend, Ishtseren Lochin, 李作女亭, 主税和賀子, 辻田淳一郎, 岩永 玲, 上條信彦, 村野正景, 藤岡悠一郎, 米元史織, 佐藤廉也, 堤研二	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中国書店	5. 総ページ数 873
3. 書名 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集	

1. 著者名 小林謙一・下釜和也・遠部慎・福田正宏・工藤雄一郎・坂本稔・國木田大・河西学・及川穰・建石徹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 186
3. 書名 土器のはじまり	

1. 著者名 三宅裕・前田修・辰巳祐樹・有村誠・板橋悠・廣永尚子・宮内優子・長谷川敦章・津本英利・長谷川修一・松村公仁・田澤恵子・花坂哲・福田正宏ほか25名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 578
3. 書名 世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江田 真毅 (Eda Masaki) (60452546)	北海道大学・総合博物館・准教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ヤクーチア考古学の最前線 Frontier of Archaeology in Yakutia	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	釜山大学校			
ロシア連邦	ハバロフスク地方郷土誌博物館	サハリン国立大学		